百合子賞　佳作　受賞作品

太陽の歩く場所

郡山ザベリオ学園中学校

友達と聞くたび思い出す。

「私ね、大きくなったら医者になる。そしたら、さくちゃんの怪我、治せるでしょ？」

転んで擦りむいただけの私に、なっちゃんが手をこちらに差し出し、一生懸命に言う。涙を目にいっぱいためて、たどたどしい言葉で未来の自分に誓う。五歳の声で紡がれる宣言の中で、医者という大人が使うような言葉がひどく浮いていた。お医者さんじゃなくて、医者。

「さくちゃんは友達だもん」

不思議なことだらけだった。痛いのは、泣きたいのは私なのに、なっちゃんが泣きそうになっている。怪我したのは私なのに、なっちゃんが治そうとしている。なっちゃんが私のことを、まるで自分のことのように考えているのは、私がなっちゃんの友達だからということだけは分かった。

「ありがとう。私もなっちゃんのこと、友達だから応援する」

将来を友達のためだけに決められる、それが当然と思える時代。もう消えてしまった、幸福の象徴。

私となっちゃんは、間違いなく友達だった。

死ぬ気なんだと思った。それしか思わなかった。

死のうと思う、だから来て。さくちゃんに手伝ってほしいの。そう言われて断る人がいたら教えてほしい。幼馴染の言葉に半ば脅されるように、私はなっちゃんの部屋にいた。本棚に囲まれた小さな部屋は、私の知っている頃よりも窮屈に感じて、前来たときは小学校低学年くらいだったと思い出す。今は中二だから、だいたい六年くらいはここに来ていないことになる。懐かしい、と感慨にふけった。

なっちゃんがバッグから取り出した青い大学ノートには、ご丁寧に船林花奈となっちゃんの名前が書かれていた。小さいときに嫌って言うほど見続けた名前。

なっちゃんの名前と自分の名前、どちらが好きかと問われると、今は自分のものを選ぶ。だけど五十嵐咲良という自分の名前を、昔は嫌いだった。いがらしを漢字で書きたかったのに、先生に駄目と言われたから。五十は習っていたから使いたいのに、どうして書かせてくれないのかと不満だった。

なかなか名前の漢字を書けない私に比べて、なっちゃんはすぐに書けるようになった。最初の方は皆も驚いたり褒めたりしていたけれど、徐々にそのすごさは薄れていった。当たり前だ。漢字はいつか習う。クラス全員が自分の名前を必ず書けるようになる。にもかかわらず、皆に自慢するなっちゃんは、すごく楽しそうだった。砂場で遊ぶより、皆で鬼ごっこをするより、ずっとずっと楽しそうだった。

なぜ今それを思い出すのかと考えて、答えを出す。それは、なっちゃんがそのときと似ていたからだろう。一人で楽しそうに話すなっちゃん。私を置いてけぼりにして、どんどん話を続ける。

「これに自殺のこと、書こうかなって。どう思う？」

「良いんじゃない？なっちゃんが良いなら、私は何も言うことないよ」
やるのはなっちゃんなんだから。言外にそれを滲ませたつもりだが、果たしてそれは伝わったのか。分からないまま、なっちゃんが嬉しそうに頷いた。
「ありがとう。大丈夫、さくちゃんと一緒に考えたら、きっと成功するよ」
成功するって、何が成功するのかは訊かなかった。

私となっちゃんの関係を説明するなら、近所の幼馴染で十分だ。特に仲が良いわけでも、嫌いなわけでもない。割り切った関係とでも言えば聞こえは良いが、実際にはただの無関心。今ではもう話す機会はほとんどない。ただ一歳の頃から一緒で、ずるずるとここまで来てしまっただけ。そんな今の関係になったのは、ほとんど私のせいだとは分かっている。
年に二回、お互いの誕生日にプレゼントを贈り合う。ただそれだけで、私となっちゃんは友達でいた。一個数百円のプレゼントでなっちゃんを友達と呼ぶことを求めたのは私だ。なっちゃんはその要求を受け入れた。だから私たちは間違いなく友達。でも、それだけ。
一年に片手の指ほども話さないのに、なぜかなっちゃんのことは自分が一番理解しているという自信があった。昔から知っている。なっちゃんはあのときから変わっていない。友達であり続けるためには必要な自信だ。
自殺を止めさせるべき、なんだと思う。友達なんだから、友達が死ぬのを認めるわけにはいかない。なのに止めなかった。だって、止める理由もそのための言葉も持っていない。生きてた方が良いよ。嘘みたいに乾いた、安っぽい台詞を何個かなっちゃんに伝えて、なっちゃんの決意が揺らぎないことを確認して、それで私はあっさりと諦めた。薄情者と自分で思う。仕方ないと、なっちゃんの自殺を手伝うことにした。
なっちゃんが、ノートの一ページ目に文字を書く。日時、理由、方法。委員会の報告書みたいな見出し。本当に学級委員長なんだなと、ぼんやり思った。たとえその肩書が、自ら立候補して、他に人がいなかったからっていう理由で得た肩書でも。その噂を隣のクラスの友達から聞いてきた萌花（もか）が、部活のときに教えてくれた。なんか、必死過ぎて無理。頑張って自分に価値を付けてる感じで笑えない。眉を寄せて、本当に痛々しそうに、でもどこか楽しそうに萌花が話す。ちょっと、私には分かんない。咲良もそう思うでしょ？
「理由は、あれ？」
萌花の声をかき消したくて、なっちゃんに訊く。
「さくちゃんが思ってるものかは分からないけど、うん。あれ」
はにかむように笑ったなっちゃんの髪が、肩にあたってパサリと揺れた。その顔を見て、私の想像が当たっていたのだと察する。
「……いじめ？」
自分で口に出して、ああ、そうかと納得する。そうだ、あれはいじめだ。特定の人を傷付けるための行為。命を絶つには相応しい理由だろう。
なっちゃんが少し困ったように笑って、首を縦に振った。そしてそのまま俯き、ノートにすらすらと書き始めた。何を書いているか覗こうとしたが、なっちゃんの腕に隠れて見えない。何をするでもなく、私はなっちゃんの手が動く様子を見つめていた。
「理由は、いじめ。ありきたりだけど、十分それっぽい」
「それっぽいって言うのは？」
「ニュースでよく見るようなやつ」
ふいにノートに向けていた目を上げ、なっちゃんが私をじっと見つめた。がり勉みたいと言われている、なっちゃんの丸い大きい眼鏡に、私の困惑した表情が映っている。

「私さ、絶対ニュースになるような自殺をしたい。皆の記憶に残るような」
そう宣言したあと、きゅ、となっちゃんが口を堅く結ぶ。「私は自殺した」と、思い知らせたい相手がいると容易く想像できた。心配そうにこちらを窺う姿は、だいぶ昔の記憶の姿と瓜二つで、思わず笑ってしまった。
まだなっちゃんと遊んでいた頃の、不安そうな姿と、そっくりだった。
「さくちゃんはさ、あの子たちと一緒に遊びたいって思う？」
砂場に大きな穴を掘りながら、なっちゃんが訊く。あの子たちが、今鬼ごっこをしている同じ一年生の子たちだと、少しして気づいた。そろそろと怯えながらの質問に、私は少し迷って、そして笑って答える。
「ううん。なっちゃんと遊んでるほうが楽しいもん」
「そっか」
私たちのすぐそばを、同じクラスの女の子が笑い声を響かせながら走り去る。可愛い服を着た女の子がその子を追いかけて、「つかまえたー」と叫んでタッッチした。話したことはあまりないけれど、笑いあう二人は楽しそうで、キラキラして見えた。
二人だけの世界に、他人が介入してきたのは一年生の夏だろうか。なっちゃんと遊ぶ砂場で、ぼんやりと眺める鬼ごっこ。私が他の子と一緒に鬼ごっこで遊び始めるのは案外早かった。なっちゃんと遊ぶより、他の友達と遊ぶ方がはるかに楽しいと気付いたから。単純明快で残酷な理由で、高学年になる頃には、なっちゃんと遊ぶことはほとんどなくなっていた。
変わってない。何も、本当に何も。あの頃のまま。
「そっか。分かった、私が凄いの考える」
何も自分で決めずに、全てを私に任せる姿勢。それが信頼から来てるものなら嬉しいが、きっとそんなことはない。ただ責任を感じたくないだけ。そしてその考えが、いかに自分勝手か。その甘さに、なっちゃんは気付かないのだろう。無知だと思う。何も知らない、気付かない。憎らしい身勝手さ。
なっちゃんの性質を久し振りに見て、忘れかけていたあの声を思い出す。
許せない。
蒼生（あおい）ちゃんが、小学生の頃に私に言ってきたこと。花奈ちゃん、なめてる。世界を自分に都合良いように考えてる。医者になりたいって言ってても、何もしてないじゃん。何もしないで医者になれるはずがないのに。だから私は、花奈ちゃんを許さない。
蒼生ちゃんは、何でもできた。勉強も運動も。運動は苦手だったのに、努力してできるようになった。一人でこっそり逆上がりの練習をしているのを見て、見てはいけないものを見てしまった気がしたのを覚えている。完璧だと思っていた人が、努力するところ。綺麗な洋服の糸のほつれを見つけて、目を背けるのに似ている。だけどこの場合、その努力は美談として語れるものだ。蒼生ちゃんは、ちゃんと努力してた。陰でひっそり、頑張ってた。夕方の校庭、一人で練習しているその光景を、糸のほつれだと捉えたのは私だけだ。
許せない。
蒼生ちゃんが語尾を強めて繰り返す。その通りだと思った。自分に良いようにしか考えないなっちゃんを、蒼生ちゃんは許せない。あの甘さは、努力できる人には受け入れられない。蒼生ちゃんのように、自分の努力を信じられる人には。
蒼生ちゃんは、私たちとは違う中学校に入学した。何人もの卒業生を県下一の進学校に送り出している中学校。それを聞いたとき、なっちゃんは「すごいね」と褒めていた。
甘さにイラつくし、嫌いになるときもあるけれど、私は基本的になっちゃんのことを好きでいたい。そのために私はこうしてなっちゃんを手

伝っている。
　蒼生ちゃんが言うような、そんな程度じゃない。私はなっちゃんに蒼生ちゃんの何倍も傷付けられてきた。でも、だからこそ、その甘さが好きなのだ。わざとらしいまでの純粋さを愛している。人の悪意に「え？」と返す図太さ、図々しさに、何回かは憧れた。
　なっちゃんのことを馬鹿にする奴がいたら、絶対に殴ってやる。なっちゃんのことを馬鹿にできるのは、私以外にいない。他の人間は馬鹿にできる程傷付けられていないじゃないか。あの甘さに傷付けられたんだから、私はなっちゃんの甘さを馬鹿にする。あの甘さに辟易しながら付き合う。私がなっちゃんに傷付けられなくなったとき、それが私となっちゃんの付き合いが終わるときで、私が馬鹿にできる人がいなくなるときだ。
　中一のある日、机が派手に倒れていた。なっちゃんの机だった。その周りには、大量のプリントが散らばっていた。委員会や授業で使うプリント。何かの本のページが、数枚の塊になって折れていた。それが、いじめ。理想的で面白みのない、典型的ないじめだった。
　なっちゃんがそれを見て涙を零す。隠すこともなく、泣いている自分を皆に見せるように。そんななっちゃんを慰めるのは、たった数人の女子だけだった。大丈夫、気にすることない。周りのクラスメイトは、遠巻きにそれを眺めるだけだった。ボロボロ、ボロボロとなっちゃんの目から涙が溢れる。こんなにアピールしているのに、慰めるのは数人だけ。
　見たくなかった。この記憶を抹消したかった。蒼生ちゃんのときと酷似した感情。なっちゃんの純粋さを表しているようなそれは、ただただ私を傷付けるだけだった。皆が同情してくれると信じて泣き続けることは、私には到底できないことだった。それをなっちゃんはやってのけた。中学生にもなれば徐々に気付き失っていくものを、なっちゃんは何も気付かず持ち続けていた。
「何日にやるの？」
　私がなっちゃんに訊くと、シャーペンをクルクルと手で弄りながら、うーんと唸った。私が去年あげたプレゼント。萌花たちと遊びに行ったときに買った、ハートが描かれた安くて可愛いシャーペン。使っているんだと、今更気付いた。
　十月。できれば最後。
　なっちゃんが言う。そのまま何も言わずに黙っていた。きっと思っていた反応と違っていたのだろう。見当をつけながら、でもなっちゃんの求めていた反応が分からなくて、お互いに黙っていた。
「止めないんだ？」
　ぽつり。なっちゃんが零す。
　その言葉を聞いて、なっちゃんは止めてほしかったのだと理解した。おそらく、私が最初にかけた言葉では物足りなかったのだろう。慌ててなっちゃんにかける台詞を探すが、それよりも早くなっちゃんがノートに文字を書いた。十月三十一日。日付の空欄がなっちゃんの角張った文字で埋まる。
　文字を見た瞬間、決まってしまったのだという気持ちに襲われた。なっちゃんの死ぬ日。私となっちゃんの関係が終わる日。
「なんで十月なの？」
　気持ちをどうにか誤摩化したかった。取るに足らない質問で、この気持ちを消し去ってしまいたい。
「なんとなく。それに、受験始まったらめんどくさいでしょ」
「受験、気にするんだ」
　そんなこと、気にしないと思ってた。なっちゃんなら、皆が受験でピリピリしても能天気に笑っていると思っていた。私の一種の希望でもある。
「気にするよー、それは。逆に気にしない人っているのかな？」

笑って話すなっちゃんが、まだ全部決めてないのにノートをパタンと閉じた。もう終わり。なっちゃんが立ち上がる。ムワッとした空気に、改めて不快感を覚えた。

「ありがとね、さくちゃん」

私も立ち上がると、二人で玄関まで歩いていった。前来たときは私の方が小さかったのに、いつの間にかなっちゃんよりも身長が高くなっていた。月日の流れはなんとやら。この年で実感するとは考えなかった。

「あれ、もう帰るの？」

「はい。お邪魔しました」

台所から声がする。おばさんと話したのもいつぶりだろうか。なっちゃんが「お母さんには関係ないでしょ」とおばさんに文句を言っているのが聞こえた。あの会話も、もう聞けなくなるのかと思うと、何だか泣きたくなった。

「じゃあね」

「うん、また」

玄関先で手を振って、なっちゃんがドアを閉める。

それからは何もなかった。なっちゃんと話す機会なんてない。怖いくらい普段通りだった。いつ自殺について決めるのかと焦っていた九月の下旬、私はなっちゃんに呼び出された。本人からではなく、なっちゃんと仲の良い地味な感じの子から。花奈ちゃんが、次の日曜に家に来てって言ってた。そう教えて、すぐにそそくさと自分のクラスに戻ってしまったその子の名前がどうしても思い出せない。目が異様に大きいアニメのキャラのクリアファイルを手に持っていた。なっちゃんの部屋の本棚で見かけた、生活感のないヒョロヒョロの優男が微笑んでいるイラスト。

日曜日は何の予定もなかった。

なっちゃんの家に行こうとすると、笑顔のなっちゃんが本を持って家から急いで出てきた。そして私を見つけると走り寄り、ちょうど私となっちゃんの家の中間地点で立ち止まる。

私が近づいたのを見届けると、なっちゃんが口を開いた。この本の続き、出るんだって、と、なっちゃんの弾んだ声が聞こえる。嬉しそうに、本当に嬉しそうに、私に言う。楽しみだなぁ。

私の愛したなっちゃんの純粋さが、私へのあてつけのように思えた。ほら、私はこんなに楽しそうにできる。さくちゃんにはできないでしょ？ほら、羨ましいでしょ？

「なっちゃんは、さ」

「うん？」

「その続き、買うの？」

「うん。あまり高くないみたいだし、買おうと思うよ」

へらっと心底楽しみですといった表情でなっちゃんが答えた。その表情が、その話し方が、私の好きだった、なっちゃんの何も知らない純粋さを表していて、それが私には耐えられない。

何だそれ。

何だそれ。いったい、どういうつもりなんだ。

死ぬつもりじゃなかったのか。皆に後悔させるための、あの決意を、そんな本で捨てるのか。

その本なら知っている。登場人物もストーリーも、全然目を引くところがなかった。主人公が病気のヒロインを救おうとする話。どこにでもあるじゃないか。あからさまな不幸なんて、全然面白くない。続きだって、どうせヒロインが救われて二人で喜びの涙を流すか、助からずに主人公が泣くか。だいたい想像できるじゃないか。

「うそじゃん」

それは、あんまりだろ。私じゃなくて、そんなもので自殺を止めるのか。そんなの、あんまりだろ。私ではなっちゃんを助けられないってことか。

「さくちゃん？どうしたの、なんか……」
「自殺するって嘘じゃん。死ぬ気なんてないじゃん」
なっちゃんがおろおろしている姿が目に浮かぶ。困ったように笑って、そして私に話しかけるのだ。今の私にかける適当な言葉、たとえば気持ちなんてないその場限りの謝罪とか。
「さくちゃん、ごめんね？」
ああ、ほら。分かってしまう。
仲が良いわけでもない。嫌いなわけでもない。割り切った関係とでも言えば聞こえは良いが、実際にはただの無関係。それなのに、ずるずるとここまで来てしまった。相手の言動を想像できる程度には、相手を知ってしまった。それが今までの私のせいなのだから笑いたくなる。
「……もう、死ぬ気はないんでしょ？」
「うん。もう良いかなって」
空気に溶けそうなくらい小さく訊いた私になっちゃんが笑って答えた。もう、何も言えない。言うことない。
私は結局、何もできなかった。
いつもそうだ。私に任せるくせに、自分で何となく解決してしまう。私の気持ちなんて考えもせず。医者になるのだって、私が怪我してもしなくてもそれを目指してた。
「あ、あのね」
なっちゃんの、空気を変えようとわざと明るくした声が変に遠くから聞こえた。のろのろと声のした方向へ顔を動かす。
「さくちゃんに言わないといけないことがあって。どうしても、言わないといけないの」
例の困ったような笑顔でなっちゃんが言い切る。
「何？」
「あの、いじめ、あったでしょ？あれ、本当は」
「知ってた」
なっちゃんの声に被せて私が言う。え、となっちゃんが呟いた。
「あれ、やってたのなっちゃんでしょ。知ってたよ、最初から」
こんなことまで分かってしまうのだから、ある意味証明にもなるかもしれない。私となっちゃんの関係の証明。ただ長いだけの友情に、少しでも意味があったのだと。
いじめ。自分で自分を傷付ける。自己満足の自傷行為。なっちゃんは、自分の机を蹴って倒した。筆箱をゴミ箱に捨てたのも、委員会のプリントを破いたのも、全部なっちゃんだ。理由なんてなかった。目立ちたいから、泣きたいからで十分納得できることだ。たぶん自殺も、また同じく。
「そっか。そうだったんだ」
なっちゃんが泣きそうな声で言った。自分に言い聞かせているのだろう。もしくは、納得しようとしているのか。どちらにせよ、私の言葉はなっちゃんにとって意外なものだった。
ふとなっちゃんが私の方を向いた。きゅ、と口角が上がり、目に涙をためながら、力強く宣言する。
「本の続き、買ったら貸してあげる。だから、絶対に待っててね。さくちゃんに言いたいことがあるから」
思わず目を見開き、ぽかんと間抜けな顔をしてしまう。なっちゃんの顔がぐにゃりと歪んで見えた。
家と家の間で、中学生女子二人が泣いている。そんな状況の異様さに笑いながら、震える声を紡いだ。
「分かった。いつか借りる」
目をこすってなっちゃんを見ると、なっちゃんは目をこすっているところだった。
待ち合わせ場所に着くと、もうなっちゃんはそこにいた。家と家の中

間地点、思い出の待ち合わせ場所だ。高校生になって、中学生のときには着そうもなかった服を着ていた。白いワンピースにサンダル。薄い青色のバッグ。雑誌の特集に載ってそうなコーディネートだった。特集のタイトルは、「モテる女の子の爽やか夏コーデ」だろうか。想像しながらなっちゃんに近づき話しかける。

「なっちゃん、ごめん。遅かった？」

「あ、さくちゃん。平気だよ、私も今来たところだし」

私の言葉を否定するように手を左右に振って、笑いながらなっちゃんが答えた。私の知っている頃とは違う、結ばずに肩まで伸ばした髪。その髪が、なっちゃんの手の動きに合わせてゆらゆらと揺れる。

「そういえばさ」

「うん」

「どうして突然遊ぼうなんて言ってきたの？」

「ああ」

そこまで聞いたなっちゃんが、おもむろに持っていたバッグに手を入れた。そのまま何かを探すようにゴソゴソとかき回す。そして「あ」と呟くと、一冊の本を取り出した。表紙に病院らしい白いカーテンと二人の男女が描かれている。

「約束、守らないとさくちゃんに怒られるでしょ？」

屈託もなく本を差し出すなっちゃんを見て、ようやく心の整理がついた。今なら認められる。私は、なっちゃんを嫌いだった。相手を知らないと馬鹿にできない、私は相手を好きだから馬鹿にできる。そんな子供の意地でなっちゃんと仲良くしようとしていた。今も、きっと同じだろう。なっちゃんを、昔のように好きになることはできない。打算やら友達付き合いの面倒さを知る前のようには、一緒に遊べない。

「ありがとう。それ、借りるね」

「あ、待って」

手を伸ばし、本を受け取ろうとした私になっちゃんが声をかける。ヒョイと本を自分の後ろに隠して、私に恐る恐る訊いた。

「萌花さんとは、仲直りしたの？」

ずっと訊こうか迷っていたのだと簡単に見て取れた。でも、そんなことはどうでもいい。ただただ衝撃だった。知っていた。なっちゃんが、私たちが喧嘩してたのを知っていた。

「誰が言ってたの？」

「ううん。言われてないけど、さくちゃん、萌花さんたちと中二のとき、あんまり話してないなぁって」

私がなっちゃんのことを知っているのと一緒で、なっちゃんも私のことをちゃんと知っていた。分かっていた。確かに、あのとき私は萌花たちと喧嘩してた。萌花の彼氏が別の子を好きだってことを、私が知ってたから。それを萌花に教えなかったから。しようもない理由で、私は喧嘩してた。死んでやる、と自暴自棄になっていた。

「萌花は高校でも同じクラス。昨日も遊びに行った」

「そうなんだ」

私の返事に満足そうに頷いて、思い出したように「言いたいこと、忘れてた」と言った。言いたいこと、というのはあの日の約束か。ほとんど忘れていた。喧嘩していたことを知られていたんだから、もう何を言われても受け入れると決意して、「何でもどうぞ」と言う。

「さくちゃんが死んだら、私嫌だよ」

「ば……」

馬鹿じゃないの、と言いかけて止めた。あのとき言えよ、もう遅いじゃん。湧き上がる感情が次々と言葉になって、私の口から溢れそうになる。本を借りるために生きているけど、私はあのとき、なっちゃんと死ぬつもりだった。萌花たちに分からせてやりたかった。お前らのせいで死んだんだと、後悔させてやりたかった。もしあのとき言ってくれたら、私

は死のうと決意したのに。くだらない反骨精神で自殺を決意できたのに。十代女性二人の自殺。特に仲良しでもない中学生の心中。これ以上ないくらいの、記憶に残る素晴らしい事件だと思ったのに。

なっちゃんは私をちゃんと理解していた。私が思ってるよりも、ずっと、ずっと。

「あ、蒼生ちゃん、県外の高校行ったって。この前手紙が来てた」

なっちゃんが何の綻びもない笑顔で、打ちのめされている私に向けて微笑んだ。なっちゃんのことを許せなかった蒼生ちゃん。もう許せるようになったのか。それとも、事を荒立てないためか。なんとなく後者だなと考える。人間は何が起きても、良くも悪くも変わらない。お互いのことを自分が一番分かってると信じていた頃のまま、だらだらと成長してしまう。相手のために将来を決めた頃から、私もなっちゃんも変わらなかった。変われなかった。無知だったのは、私も一緒だ。

今こそ、宣言しよう。

私となっちゃんは、間違いなく友達だった。

（指導教諭／西　山　秀　典）

《作品の意図》

五十嵐咲良と船林花奈の関係を通して、中学生女子の複雑な感情を描きました。人を救うのは何でも良いのだと考えて、この物語をつくりました。

《作品の寸評》

主人公咲良の目で捉えた幼馴染花奈の人物像と二人の間の感情の在り様を描いた物語である。「間違いなく友達だった」と言い切れた幼児期から他の友達が介入してきた時を経て、「仲が良いわけでも嫌いなわけでもない、割り切った関係」となった中学二年生という時期。いじめや自殺という言葉で揺れ動く思春期の不安定な心理を巧みに描いている。

「自分勝手」「自分の甘さに気づかない無知」「能天気」と断じ、「その甘さに傷つけられ」「辟易しながら付き合」っていたはずの花奈が、ちゃんと自分を見ていて、中学生の時の同級生との喧嘩を知っていた。高校生になってそれを聞いて衝撃を受け、花奈への見方を劇的に変えるという展開は、友達とは何か、そして友達に映って見える自分とは何かを考えさせられる優れた作品である。また、「五歳の声で紡がれる宣言」や「空気に溶けそうなくらい小さく訊いた私に」など、読書量の豊かさを感じさせる表現力で読者を引き付け、一気に読ませる筆力がある。

（審査員／伊　藤　幸　夫）